

日野和牛復活に懸ける

第9回全国和牛能力共進会へ 町から3頭が出品

「和牛のオリンピック」とも呼ばれる
全国和牛能力共進会（全共）。
5年に1度開かれるこの大会が
この10月、鳥取県で開かれ、
全国から優秀な和牛が一堂に会して
その優劣を競います。
日野町からは、3頭の牛が
県代表として出品されます。
日野和牛の歴史と
共進会に懸ける生産者の声を
紹介します。

まちの和牛の歴史

日野郡産の牛は、小型でも
労役に耐えて飼いやすいと、
明治以前から主に農業の力仕
事のために飼われていました。
また、明治10年代の終わりご
ろからは、在来和牛の長所を
活かした改良も始まりました。
昭和30年代には農業の機械
化が進み、農耕牛としての役
割が薄れてきたため、主に肉
用牛として飼われるようにな
りました。

昭和41年、岡山県で開かれ
た第1回全共では、鳥取県代
表の「気高号」が主席を獲得。
気高号は全国に後継牛を残し、
和牛改良の元祖と呼ばれる名
牛になりました。

しかし、その後、日本の農
業の構造も大きく変化、農村
の過疎化や農家の高齢化など
により、和牛を飼育する農家
も減っていききました。

町内で飼われていた和牛の
数は、大正末期の約2000
頭をピークに、昭和40年は約
900頭、昭和62年には約4
00頭（飼育農家188戸）
と減少しており、現在では約
100頭が30戸の農家で飼育
されています。



西村さんといちかつふく号

全共ひとくちメモ ~種牛の部第2区~
生後14か月~17か月未満の若い雌牛を出品する部門です。鳥取県代表として西村さんの「いちかつふく号」がただ1頭出品され、全国から集まった優秀な和牛たちと優劣を競います。

牛は生きがい 日本一を目指したい

西村 槐さん
(下榎)

西村槐さんは、和牛飼育60年の大ベテランですが、全共に出品するのは初めてとか。「出品が決まったときは、まるで甲子園出場が決まった高校球児のような、ヤッターという気持ちで、ガッツが湧いてきましたね」と喜びを表現してくれました。

そんな西村さんも、体調を崩し2年間牛飼いを中断したことがあるそう。牛は宝と話す西村さんは夢を捨てきれず、周りの反対を押し切って再び飼いを始めたところ自身も元氣を取り戻したそうです。西村さんにとって、牛はまさに生きがいだと言えるでしょう。「全共に出場するからには日本一を目指します。そうすることで鳥取県の名前も上がるし、日野和牛を全国に広めることができます」と全共への抱負を語りました。



「3頭の出品牛は神からの贈り物かも」と話す松本さん

町内で新たな和牛改良が行われるようになったのは、平成5年にまでさかのぼります。牛肉輸入自由化が実施され、国産牛の生産者が打撃を受けていたその年の12月、日野町の子牛価格が全国平均最下位となったことがきっかけでした。

町和牛部会会長の松本勝美さん(本郷)は、家畜人一授精の仕事しながら自宅の牛舎で30数頭の牛を飼育している生産農家。また、県和牛改良組合協議会の会長を務めるなど、県内の和牛改良の中心的存在でもあります。

牛歩のように慎重に 着実に改良に取り組んで

鳥取の和牛は全国からも注目を浴びており、この全共は流れを変えるチャンス」と、共進会への意気込みも十分。そんな中でもやはり課題は後継者問題。これからの課題について松本さんは、「農業に限らず後継者不足は共通の課題。和牛改良のリーダーを育てなければ」と話します。

最後に、「この全共を町内で和牛を見直すきっかけにしてほしい。農家には1、2頭でも牛を飼ってほしいと思いますね。価格が回復した今、経済面でも利益はあるはず。5年、10年先のまちを考えたとき、みんながまちをどう守っていくか。農業でも食べていけるまちになればと思います」と話しました。その言葉からは、長年の経験からの自信とまちへの愛情が感じられました。